

がんと向き合う



がんになったとき 仕事をどうする？

働く人ががんになって直面するのが、「仕事をどうするのか」という問題です。がんになったからといって、ただちに命にかかわるとは限りません。症状に合わせて、働きながらがんと暮らしていくことのできる時代なのです。

監修/
国立がん研究センター
がん対策情報センター
がんサバイバーシップ
支援研究部長

高橋 都

選択肢は退職だけじゃない
決断は落ち着いてから

がんが診断されて「職場に迷惑をかける」「もう働くことはできない」と、退職を選択してしまう人が少なくないようです。しかし、生涯で2人に1人ががんにかかる時代には、がんは特別なことではなく、結婚や介護、子育てなどと同じように多くの人に起こりうる出来事です。ライフサイクルが変化しても働き続ける人がいるように、がんになっても選択肢はさまざまです。

だれもががんとわかった瞬間には驚き、恐怖を感じ、混乱します。その状態で大きな決断をせず、退職することで失う生きがい、経済的な損失などを落ち着いて考えられるようになってから決断しても遅くはありません。

がんと就労について考える際は、時間の経過で病状が変化する点に注意しなければなりません。治療がうまくいき完治するかもしれないし、悪化したり再発したりすることもあるかもしれません。仕事の「継続か」「退職」の二者択一ではなく、病状や職場環

境に合わせた働き方、対応を見つけていくことが重要です。

理解してもらったために
できるだけ言葉にする

治療を受けながら働く場合、上司や同僚など職場でしっかりとコミュニケーションをとり、そのときの病状でも「できること」をアピールします。加えて、勤務時間や勤務シフトへの配慮など、難しいことやしてほしい配慮を明確に伝えることが大事です。

もちろん、会社側と本人とでは立場も意見も違います。企業には労働契約法に基づき労働者を生命・健康の危険から守る安全配慮義務がありますので、「働きたい」という気持ちにすべて応えてもらうことは難しいかもしれませんが、

大事なのは会社に状況を正しく理解してもらうこと。そのためにはできるだけ言葉にすることです。黙っているだけでは、社会に存在している偏ったがんのイメージに引きずられた対処を受けてしまう可能性があります。たとえば治療などで仕事のパフォーマンスが下が

ることを懸念し、会社側から「戦力外」と早まった認識をもたれることもありえます。

きちんと言葉にして情報を伝え、お互いの立場、意見の相違を尊重し、医学的に正しい知識に基づき理解し合う。それが本人と会社の両者が納得するために必要なプロセスなのです。

正しい情報を伝えることが
最初のステップ

「職場がどこまで配慮できるか」を引き出すつもりで、周囲の人に正しい情報を伝えることが最初のステップです。必要であれば、さらに医学的観点からのアドバイスを医師から職場へ伝えてもらいましょう。

実際にはなかなかすべてが思いどおりにいくわけではないかもしれませんが、少しずつでも改善すれば、という気持ちをもって「コミュニケーションをとることが、働きながら治療を受けるうえで、その後の人生を充実させるうえで大切なのです。」

職場の配慮を
引き出すには…



無料でダウンロードできる

患者・
家族向け
冊子

『がんと仕事のQ&A』

～がんサバイバーの就労体験に学ぶ～

がんになってから仕事とどう向き合うか、患者本人や家族が直面する困難にはさまざまなものがあります。実際のがん体験者が経験した仕事に関する問題に、Q&A形式で答えた冊子が『がんと仕事のQ&A』です。がんと向き合うためのヒントになりますので、ぜひ一読してみましょう。「がんと就労」サイトから無料でダウンロードできます。



がんと仕事のQ & A

- 1章 仕事とがん公表
- 2章 働き方の問題
- 3章 お金と健康保険
- 4章 家事や子育て

<http://www.cancer-work.jp/>

がんと就労

検索